

昭和56年2月1日発行 雑誌登録番号  
平成10年7月1日発行 月刊1回1日発行  
俳句雑誌 第34巻第7号

俳句雑誌「おき」

おき

7月号

沖  
発  
行  
所

# みちのく五月

林 翔

## 松島の句

今日よりの植田縞とも言はむかな

一枚に千のいのちよ植田風

峡深く風に飢ゑをる五月鯉

若葉浸しの眼に眺むなり青松島

松島の句が詠みにくいことは芭蕉が松島の句を遺していないことでもわかるが、「沖」の人がどう詠んだか。それは本誌を見て頂くこととして、『地名俳句大歳時記』（角川書店刊）から若干拾ってみよう。

誰知らぬ者ない名句は、  
松島や鶴に身をかれほととぎす

曾良

であるが、われわれが松島を訪れた時、時鳥の季節だと思うのに鳴いていなかった。以下、新年・春・夏・秋・冬の順に拾ってゆく。

松島の鳶を遠見の三日かな

今野福子

松島や松をつらねて春霞む

本田摂子

松島の松をこぼるる日雀かな

成田千空

松島や松なき島も風薫る 磯野允伯

松島の松のみどりに船遊 高浜年尾

松島は合歡の花さへ松隠り

磊々 峽岩・岩・岩の涼しさよ

標高差一メートルの滝飛沫

滝音を秘むる深さや岩の壁

俯瞰して水泡幾億秋保滝

紫の上向くは桐下は藤

峽村に蛙声満ち満つ月まどか

松島の西日に消えし男かな

鈴木鷹夫

高野ムツオ

秋立つや松島にして松のこ糸

長谷川歌子

松島や秋天高く鳶渡る

菖蒲あや

松島の松籟荒し天の川 小川原嘘帥

松島や海へ吹かるる稲雀 角川照子

松島の松の中なる樞紅葉 畠山讓二

松島に一夜を明かす冬の蝶

阿部みどり女

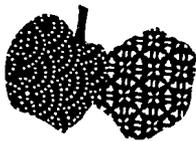
遊船を追ふ松島の時雨かな

河野友人

掌に貝をのせ松島のしぐれ寒

岡部六弥太

林 翔



# 遠の朝廷

能村 研三

多賀城跡

みちのくの遠の朝<sup>みかど</sup>廷<sup>じょう</sup>は菖蒲田に

千年の壺の碑透かす若楓

壺の碑の文字けぶらへる若葉風

瑞巖寺

大寺の仏前婚は涼しかり

## 真砂女さんの思い出

鈴木真砂女さんが三月十四日、九十六歳で亡くなった。これほど親しみ愛された俳人も数少ない。「卯波」には、常連というほどではなかったが、何度か訪れることがあった。いつも和服姿に白の割烹着で店を切り盛りする姿からは、八十を過ぎた人とはとても思えなかった。

真砂女さんがNHK俳壇を担当されている時、二回もゲストにお招きいただいたが、その収録を終えても、「私はこれから店に出なければ」と言って早々にスタジオを後にされたことも印象に残っている。

登四郎は明治四十四年一月の生まれで、真砂女さんは明治三十八年十一月の生まれであるから、五歳余り上ということになるが、晩年はその歳の差を越えて遥かに饗饌としておられる真砂女さんが羨ましかった。登四郎も生前はだんだん明治生まれの俳人が少なくなるなか、真砂女さんの活躍は励みにもなっていた。父は下戸であったので、「卯波」には行く機会は少なかったが、真砂女さんは正月近くになるとお手製

朝 風 や 足 下 危 ふ き 透 し 橋

林先生句碑

開 眼 の 句 碑 に い た だ く 青 時 雨

句 碑 守 り て 良 き 枝 ぶ り の 青 松 葉

言 祝 ぎ の 開 眼 経 に 植 田 澄 む

う す 味 を 諾 ふ ま ま に 梅 雨 ご も り

麦 秋 の 一 駅 分 の 睡 魔 か な

の「おから」を野村東史留さんを通じてわざわざ届けて下さった。父は豆腐が好きであったので、「おから」も大変気に入って喜んでた。そして何より真砂女さんの気持が嬉しかったようだ。いずれにせよ、お互いに明治生まれの気骨というものがあつた。きっと今ごろはあの世で明治生まれ同士、俳句の話しでもしているのだろう。

あるときは船より高き印波かな 真砂女  
羅や人悲します恋をして  
冬に入る己れ励ます割烹着  
路地住みの終生木枯きくもよし  
戒名は真砂女でよろし紫木蓮

能村研三



# 蒼茫集

かくれ滝

小沢きく子

芽吹山の鼓動となりてかくれ滝  
桑解かれ己が素性に戻る揺れ  
仏心のいろと思ひぬ花の屑  
夏潮の眼下に満つる透かし橋  
青松島難破合祀てふ島一つ  
聖五月参道寂と瑞巖寺

多賀城址

吉田政江

師の忌来る朴の蕾のふくらみに  
風青し出を待つ山車の三基ほど  
多賀城址たんぼぼの絮吹かれをり  
壺の碑の背ずんぐりと梅雨兆す  
五大堂薄暑の銅羅の打たれ艶  
明易の湯宿の枕高すぎる

流離

佐山文字

青蘆原へ流離のごとく深入りす  
若葉して杜の都は青づくし  
一湾の島また島へ緑さす

灯を消してよりの相部屋明易き  
喜寿すぎの明日へ衣更へにけり  
待つといふ事のなくなり実山椒

遠滝

渡辺昭

遠滝の音なき白さ畏れけり  
激つ瀬のひびく奈落へ岩つばめ  
谷若葉滝となりたき水急ぐ  
落瀑の寸前の水たゆたへり  
青溪の朝をせせらぐ水と雲  
清和かなこころに生きて師の一語

藤のころ

中尾杏子

川ゆるく曲る花菜の風連れて  
野の駅の別れたちまち霞むなり  
着馴れたるもの許り着て藤のころ  
藤ゆれてをり芸論の聞き齧り  
展帆のマストが放つ春かもめ  
筥をぶら下げてくる朝の弥撒



# 潮鳴集



青葉峽

北村幸子

岩ばしる水のきれ味青葉峽  
老を言ふ声に張りあるさくら守  
父の日の父の字うすれ桐の箱  
採血のさぐり静脈余花の雨  
喪の家の窓大きくて鯉幟

走り梅雨

渡辺輝子

名刹は久遠に錆びぬ走り梅雨  
磊々峽の深淵覗くかたつむり  
櫛大樹目抜通りは祭まへ  
藤波に群るる吾も亦虫なりし  
脚立もて撮る鳩亭の朴の花

透かし橋

徳植よう子

水底に万緑およぶ透かし橋  
多賀城碑「西」にひらけし青田かな

太鼓打つ少女の素足砂を噛む  
茄子苗を買ひて待たるものふやす  
切られ役に徹し端午の父なりし

春愁

杉本光祥

息吸つて止めて春愁撮られけり  
針穴に糸の通らず目借どき  
甲斐よりの峰まだ白し桃の花  
大江戸の五月揺さ振る神輿かな  
さくらんぼたわわに我も熟年へ

昂ぶれる

田辺博充

河骨は誰かが捨ててゆきし恋  
紅微かに葉桜のなほ昂ぶれる  
勤行の読経を感しゐる青嶺  
著我の花かほどまで無垢ならずとも  
揚羽蝶前世の妖しさを継げり

# 沖作品



## 能村研三選

縄文の風あらはなる野焼かな

長野

矢崎すみ子

俎板のみどりの灰汁も仏生会

日本の屋根に位置して春田打

湖へ神の社の花襖

メレンゲの円錐形に聖五月

鍵つ子の長き薄暮やしやぼん玉

懼休め花の筏とすれちがふ

暮の春ひとりひとりのベンチかな

候補者の知らぬ路地あり蜩蝶

鯉のぼり泳がせ転居完結す

水門の魚道きさら五月来る

油絵のドガの踊り子夏来たる

芽落葉松ローランサンの空の色

沈金の文箱からつぼ青葉冷

人体図の四隅めくれし薄暑かな

東京

高木 嘉久

長野

高橋あゆみ

陶絵師の小筆の乾く桜東風

愛知

柴田 近江

窯元の春塵つもる轆轤小屋

花冷の蠟涙を溜む岩屋堂

蟹たりし頃を眩しみ春田打つ

杏咲くサンローランの色のせて

この里に竹が竹打つ夏はじめ

押す水に押さるる水の花筏

ワイシャツの隅々熨して風みどり

蕉翁はエンジニアなり亀鳴けり

印旛渺茫ほどけて粗き柳の芽

筑波嶺を遠くにしたる根分かな

朝ざくら水面の影とひびき合ひ

いつせいに芽吹きし山の浮力かな

風船のひも曳き風の重さ知る

鯉幟泳ぐを風の長さとする

東京

福嶋千代子

千葉

鈴掛 穂

東京

工藤 進

あめんぼの水にこころを映しけり  
糸蜻蛉生まれ水之星となる  
懐といふははるけし座禪草

岩手

佐藤 みほ

あやふさを風に預けてしやぼん玉  
息深くさくら吹雪を身の芯に  
春の闇青磁の壺に満たしけり  
蘇生いくたび日本武尊の桜咲く

千葉

大沢美智子

木の芽雨燭引き寄せて轆轤の座  
春の航翼開きに水尾立てて  
水田明りにやすらひたまふ磨崖仏  
戦争は男の遊び葱坊主

山梨

長岡 新一

あるやうなやうな風竹の秋  
つかのまの未来を乗せてしやぼん玉  
鍬洗ふ鈍き刃先に夏きざす  
雨の日の揺れては路の丈くらべ

千葉

深田 雅敏

若鮎のトップギヤで堰のぼる  
魚信きて水面崩るる雲の峰  
猫の眼の野生にもどる桜の夜  
朝ざくら声かけて締む馬の鞍

鹿児島

田淵 葉陽

鐘かすむ音茫茫と耶蘇の村  
吉報のありて八十八夜の茶  
海光はるかふらこころ高く蹴り  
手と肢の出で蝌蚪の尾のゆくへかな

千葉

富川 明子

背のびして意地見せてゐる余り苗  
真つ先に風遊びに来水張田  
あげ潮にのりゆく小舟風五月  
家持の海山けぶる卯月波  
馬柵越しに声をかけられ風は夏  
乗りてすぐ喪のタイはつす卯月かな  
行く先を信じ急がぬ花筏  
水口のひかり震はず田植寒

千葉

安藤しおん

石川

中野 了一

## 新人賞予選句（七月）

俎板のみどりの灰汁も仏生会  
鯉のぼり泳がせ転居完結す  
水門の魚道きさら五月来る  
陶絵師の小筆の乾く桜東風  
蕉翁はエンジンアなり亀鳴けり  
いつせいに芽吹きし山の浮力かな  
風船のひも曳き風の重さ知る  
懐といふははるけし座禪草  
蘇生いくたび日本武尊の桜咲く  
戦争は男の遊び葱坊主

矢崎すみ子  
高木 嘉久  
高橋あゆみ  
柴田 近江  
福嶋千代子  
鈴掛 穂  
工藤 進  
佐藤 みほ  
大沢美智子  
長岡 新一

# 沖作品 選後句評

\*  
能村研三

俎板のみどりの灰汁も仏生会 矢崎すみ子

二句一章の句として、その取り合わせの妙に感心した。「仏生会」と「俎板の灰汁」という一見して何の関係もない二つの事が一句の中で組み合わされると、そこからは不思議な詩的な効果が生れる。俎板で青い野菜を刻んだ後みどりの灰汁が染みこんでいた印象を句にまとめた。仏生会は花まつりとも呼ばれ、美しい花で飾られた花御堂の釈迦誕生仏に甘茶をかけて釈迦の誕生を祝う行事だが、釈迦の誕生の時甘露の雨が降り注いで体を清めたという故事にちなむもの。一方、俎板も包丁などと共に古くから料理の基本をなすものとして大切にされ、包丁式の行事などが行われる時、必ず俎板開きという儀式も行われたという。俎板は「真魚板」と書かれることもあるが、真魚とは食料に供する魚と言う意味で、まな初めの時の食物という意味もある。まな初めとは生れ

たばかりの赤ん坊に初めて食物を食べさせる儀式である。二つの事から、私なりにその関係を探ってみたが、余り二つのことを執拗に関係つけることもなさそう。読者がそれぞれ二つの間に詩的な空間を生み出せばよいのだろう。

鯉のぼり泳がせ 転居完結す 高木 嘉久

小市民としての直向きな生活ぶりだが、一句の中からドラマとなつて読者の前に展開される。まだ小さな子供さんがおられる家庭か。都心を離れて郊外の一軒家に引越すことになった。トラツク何台かで所帯道具を運びこみ引越しもほぼ完了したのだが、まだ家の中も片付いておらず心の余裕もなかったが、子供にせがまれたのか、荷物の中から鯉のぼりを出して、庭に鯉のぼりをあげた。子煩悩な父親のささやかな愛情が感じられた。

水門の魚道 さらさら五月来る 高橋あゆみ

私の家の近くの江戸川にも大きな水門があり、洪水の時以外は殆ど締め切られているが、せめて魚が通る道だけでも作つてあげればよいのにと思う時がある。この句は、内水調整のために水門は閉じられているのだが、小さな魚道が作られていて、そこをたくさんの魚が往き来している。水底も浅く、魚の姿も鮮明に目に映り、それらがきらきら光つて見えた。五月に相応しい活動的な動きを捉えた句である。(以下略)